

# 「阪神高速 未来へのチャレンジプロジェクト」 第4回助成・事業実施報告書

## 1. 基本事項

団 体 名	若者防災協議会		
事 業 名 称	各家庭での防災を推進する「ジュニア防災リーダー」の育成	助成額	50 万円
申請事業の概要	<p>本会では、2021 年度より北五葉まちづくり協議会と連携し、年 2 回の防災教育プログラムを展開している。5 月の防災フェスに加え、8 月のジュニア防災リーダー養成講座を通して、特に高学年への防災教育を実施してきた。今後は、これらをより充実したものとし、低学年を対象としたプログラムを追加し、年間計 3 回の実施体制を確立したい。</p>		
申請事業の目的	<p>本事業の目的は、地域で防災を推進する子どもたち「ジュニア防災リーダー」の育成である。安全・安心なまちづくりには、地域内の各家庭の防災力の向上が急務であり、その一つの方法が子どもたちへの防災教育である。新しい教材や学習を取り入れ、子どもたちの興味関心を引き出しながら、より実践的な防災教育を目指す。</p> <p>このように子どもたちへ防災教育を行うことで、防災知識の獲得を促進すると共に、家庭の防災力向上の端緒としたい。活動内容として、これまで行ってきた学習に加えて、新規の教材や物品を活用することで新しい知識と経験を提供する。これにより、毎年開講しているプログラムを発展させ、より実践的な講習にする。すなわち、子どもの発想力や興味関心を高め、主体的な学習を促すことを目的とする。企画内容において、レゴブロックを活用したプログラムなど既存の防災教育教材と組み合わせることで、知的好奇心を向上させる教育内容にできる。これに付随して、これまで高学年のみを対象としていた講座を低学年に対しても行うことで、より包括的な防災教育を展開できると考えている。</p> <p>これにより、各家庭の防災力が向上し、地域の防災力が強くなることを通して住み続けられる安全・安心なまちづくりに寄与する。</p>		
関連する SDGs 目標			

## 2. 助成事業の実績・成果等について

<p>本会では、2021 年度より北五葉まちづくり協議会と連携し、地域の子どもの対象とした防災教育プログラムを継続的に実施している。本助成事業においても、年間を通じて学年や発達段階に応じた防災教育の機会を設けた。</p> <p>5 月 31 日に、3 人の大学生が防災フェスの一環として防災バッグ作成を実施した。参加した児童は、防災用品を実際に選定しバッグに入れる作業を行い、自分にとって必要な物品を整理した。また、防災バッグを持ち上げたり背負ったりする体験を通して、自身が持てる重量を確認する機会を設け、非常時の備えを具体的な行動として体験する場を提供した。</p> <p>8 月 20 日に、9 人の大学生がジュニア防災リーダー養成講座として、小学生高学年を対象に一日を通じた防災教育を実施した。参加して下さった 30 人弱の小学生達に対して座学およびワークを組み合わせた授業を行い、災害時の行動や役割、防災に関する基礎的な内容を扱った。本講座を通して、高学年児童が防災について継続して学ぶ機会を確保するとともに、防災リーダー育成を目的とした教育活動を実施した。</p> <p>12 月 27 日には、当団体として初めて、半日を使った低学年向けの防災授業を実施した。防災授業には、20 人弱の小学生が参加して下さった。授業では、防災に興味を持ってもらうことを目的とし、低学年児童を対象に内容や進行を工夫したプログラムを構成した。これにより、これまで主に高学年を対象としてきた防災教育に加え、低学年にも防災に触れる機会を提供した。</p> <p>これらの取り組みを通じて、本助成事業では、5 月・8 月・12 月の各月に異なる対象と内容の防災教育を実施し、地域の子どもの対象とした防災教育を年間通じて行う体制を整えた。</p>
--

### 3. 課題分析や今後の発展性

本事業の課題として、参加児童の学年が混在していることにより、授業内容のレベル設定が難しい点が挙げられる。特に低学年と高学年が同時に参加する場面では、説明に使用する言葉の難易度、説明時間、活動の進行速度に大きな差が生じ、いずれかの学年に合わせると、他方の理解度や集中力が十分に確保できない状況が見られた。低学年児童においては、用語の理解や指示の把握に個人差が大きく、同一のプログラムを実施しても、活動への参加状況や理解の深さにばらつきが生じやすいという課題が明らかとなった。

こうした課題を踏まえ、活動によっては低学年と高学年に分けて授業を実施したが、その場合においても、同一学年内での発達段階や理解度の差により、内容の難易度を適切にそろえることの難しさが確認された。特に低学年においては、学年差や個人差の影響が大きく、説明の長さや活動の進め方によって集中力や理解度に差が生じる場面が多く見られた。

12月に実施した低学年向け防災授業では、対象を低学年に限定し、内容や進行方法を工夫したものの、説明が一定時間を超えると集中力が低下する、活動の目的や意図が十分に伝わらないといった課題が確認された。一方で、内容を過度に簡略化すると、防災行動の意味や理由まで理解することが難しくなり、体験が単なる作業にとどまってしまう場面も見られた。このことから、低学年向け防災教育においては、学年を分けた場合であっても、「分かりやすさ」と「学びの深さ」を両立させた難易度設定が大きな課題であることが明確になった。

また、年間を通して複数回の防災教育を実施したものの、各回の内容や到達点が十分に整理されておらず、学びが段階的に積み重なっていることを参加者自身が実感しにくい構成となっていた点も課題として挙げられる。活動後の振り返りや、次の学習内容との関連づけが十分に行えていないことにより、学習が単発的な体験にとどまりやすい状況が見られた。

これらの課題を踏まえ、今後は対象学年をより明確に区分するとともに、同一学年内においても理解度の差を想定したプログラム設計を行う。低学年向けには、使用する用語を限定し、イラストや実演、身体を動かす活動を中心とした短時間のプログラムを複数組み合わせる構成とし、段階的に内容を深めていく。説明は活動ごとに区切り、その都度確認を行うことで、理解の定着を図る。

高学年向けには、災害時の判断や役割を考える話し合い、グループワークを取り入れ、防災リーダーとしての役割を意識した内容を展開する。加えて、同一学年内でも役割分担や課題設定に段階を設けることで、理解度に応じた学びを確保する。さらに、学年混在での実施が避けられない場合には、学年別または理解度別に班分けを行い、同じテーマであっても活動内容や指示の出し方を変える運営方法を導入する。スタッフやサポート役の配置を工夫し、低学年には個別の声かけや補助を行いながら、高学年には主体的な進行を任せることで、同一の時間・空間の中でも学年や理解度に応じた学びを確保する。

今後は、これらの改善を通じて、防災教育を単発の体験にとどめることなく、学年や成長段階に応じて段階的に学びを深められるプログラムへと発展させ、地域の子どもたちが継続して防災に関わることができる体制の構築を目指していく。



### 4. 代表者又は担当者からのひとこと

この度は、本出前授業の実施にあたり、温かいご支援を賜り、心より感謝申し上げます。皆様からの助成金により、私たちは学校へ出向き、子どもたちが防災について主体的に考え、対話しながら学ぶ機会を継続的に提供することができました。授業を通じて、子どもたちが自分自身や身近な人の命を守る行動について真剣に考える姿が見られ、本活動の意義を改めて実感しております。

今後も、学校現場のニーズに寄り添いながら、若者が中心となって防災の学びを届ける出前授業を継続・発展させていきたいと考えております。引き続きご支援を賜りましたら幸いです。誠にありがとうございました。